



「障害者と社会との繋がりをもっと作りたい」と話す岩崎さん



NPO法人 自立生活センター てくてく

いわ さき よし はる

【岩崎 義治】さん

鹿児島市

入院生活の中で夢見た もっと自由に生きること

重度の障害を持っていても自分らしく生き、地域の中で生活することをサポートする「自立生活センターてくてく」。事務局長の岩崎義治さん(71歳)は、20代の前半に全身の筋力が衰えていく脊髄性筋萎縮症を発症。電動車椅子での生活を続けながら、自立生活の支援や障害による差別のないまちづくりなどに精力的に取り組んでいます。

出身は三島村の黒島。鹿児島工業高校の定時制(機械科)を卒業後、上京して土木作業機械の設計士として働き始めました。ほどなく腰に違和感を覚え、満員電車での通勤が辛くなったために病院を受診。下された診断は脊髄性筋萎縮症でした。24歳で帰鹿し、以降34年間に渡って長い入院生活を送った岩崎さん。入院中にも「福祉の視点から文化を拓く」というコンセプトで「Viewの会」を設立。10年にわたって当事者や医療従事者のメッセージを届ける機関誌を発行し、

「条例をつくる会の会長」「てくてく」の事務局長として様々な学習会やワークショップを企画運営



講演会などのイベントも開催。障害者と健常者の間の壁を乗り越え、溝を埋める活動に汗を流しました。

自立した生活を決意したのは58歳の頃。「人生を終える前に、心と体を解き放って自由に暮らしたかった」と振り返りますが、いざ実行するまでには「できる。できない。」という問答を日々繰り返していました。

差別や偏見をなくすために 車椅子で町を駆ける日々

自立の決断を後押ししたのは、入院中に交流があった短歌の先生の「ただ町の中を車椅子で走るだけでいい。できないことではなく、できることを探さないさ」という言葉でした。



鹿児島県に障害者差別禁止条例をつくる会発足式での岩崎さん(平成24年)

自立した生活を実践してみても、障害を理由とする様々な差別によって、辛さや生きづらさを感じている人がたくさんいることを知った岩崎さんは、平成24年に「鹿児島県に障害者差別禁止条例をつくる会」を結成し、会長に就任。様々な学習会やワークショップ、街頭キャンペーンを展開し、平成26年の条例制定後も障害者差別解消に関する普及・啓発活動を継続しています。「僕たちも社会のルールに合わせて生きていますが、ルール自体に差別や偏見があつてはいけません。障害にも差別にも特効薬はありませんが、地道に一步一步取り組んでいきたい」と話します。

NPO法人 自立生活センターてくてく

鹿児島市武1丁目 28-10-102
TEL&FAX.099-208-0527
http://tekuteku150.web.fc2.com

— 岩崎さんが詠んだ歌 —

- ・「治るよね」問いくる子等の澄める眼に うんと言ふ嘘神許されよ
- ・人去りて夕陽に染まるグラウンドを 一壘二壘車椅子駆くる
- ・介助者に向ける視線のすぐ横に 会話のできる私がいま

